06

宮城県
山元町

特定非営利活動法人ポラリス

アートの力が支える障害者福祉の充実と地域づくり

宮城県山元町で、壁画アートの制作やアートを活用した仕事の創出、地域の魅力を発信するプロジェクトなどに取り組んでいる。「震災からの復興・創生に取り残される人がいてはならない」という強い信念が共感を集め、地域内外とのさまざまな連携が生まれた。

取組のPOINT

ヒト	アートの可能性を感じる
着眼点	障害者福祉と地域づくりを並行
連携・協働	世代･立場･業界を超えた連携体制
持続性	支え合い素敵に暮らせるまちへ

DATA

取組主体　特定非営利活動法人ポラリス

取組内容　障害者福祉と地域づくり

人物紹介

代表理事　田口 ひろみ（たぐち ひろみ）

東北福祉大学卒業。約30年前に仙台市から山元町に移住。2008年から精神障害者通所授産施設「工房地球村」の施設長を務め、2015年に退職。同年5月に 特定非営利活動法人ポラリスを立ち上げた。

ヒト　アートの可能性を感じる

被災した障害者の心のケアに奔走

およそ30年前に山元町でマイホームを手に入れ、仙台市から家族と共に移り住んだ田口ひろみさん。それから10年後、育児がひと段落し、子育てグループ仲間と取得したヘルパーの資格を生かそうと、社会福祉協議会で働き始めた。以来、山元町で長く障害者福祉に関わることとなる。

1998年、町に開所した障害者の授産施設「工房地球村」の指導員となり、後に精神保健福祉士の資格を取得。2008年には初代施設長の退所を受け施設長に就任した。その３年後に、東日本大震災が発生し、施設は休止を余儀なくされた。

精神保健福祉士の資格を生かし、避難所や自宅などで身を寄せる障害者や心のケアが必要な人たちを見守る支援を行った。多くの犠牲者や支援を求める人がいた山元町で、少数派である障害者の支援は後回しになっていると痛感する。

「最初はその支援業務を一人で担わなければならない状況でしたが、その後に全国から応援に駆けつけた精神科や福祉の専門スタッフに助けていただきました」

「カフェ地球村」での対話と学び

授産施設の再開後も、障害者の心身のケアを継続した。また2012年には、施設内に障害者の仕事場づくりと、地域のコミュニティを再生することを目的とした「カフェ地球村」をオープン。障害者とその家族、地域住民や復興支援ボランティアなど、さまざまな立場の人たちが来店し交流することで、カフェは地域復興のための対話と学びの場となった。

さらに、全国で活躍する障害者アーティストの支援により、障害者のアート作品を活用した仕事を創出。アートの力に可能性を感じ、障害者も地域を助ける側になれると思ったという。

農業生産法人での就労支援の様子。イチゴを入れる箱折り作業をする

2016年9月にオープンした「ポラリス『こう・ふく』アトリエ」でのアート活動の様子

世代や立場を超えた「対話と学びの場」2015年6月に開催した海士町の町づくりについての勉強会の様子

多くの人が津波で犠牲になった中、幸いにも生き残ることができた。そして、震災後に全国から駆けつけた支援者から、先進的な障害者支援と地域づくりを学ぶこともできた。「この学びを山元町の障害者福祉と地域再生に役立てることこそが私の使命」と強く感じた田口さんは、2015年に施設長を退職。同年5月に特定非営利活動法人ポラリスを設立した。

着眼点　障害者福祉と地域づくりを並行

社会的弱者の心に寄り添う

障害者アーティストと出会い、障害者が助ける側に回ることで「生きる力」を身に付けられることを知った。それは、震災後すっかり受け身になってしまった地域住民に対しても同じ効果を生むはずだと確信した。そこで、障害者福祉と地域づくりを同時に推進することで、誰もが素敵に生きて働ける地域づくりを目指すことにしたという。

最初に取り組んだのは被災した障害者の社会参加の場づくりと、障害者を含めた地域住民の心のケアだった。

障害者の社会参加の場づくりでは、アートやボランティア、調理、地域学習などの活動に、2年間で延べ1700人が参加。そして、地域住民の心のケアでは、被災住民との対話の場（まちなか心の保健室）を設けたり、精神科医や看護師、地域住民が集い、うつ病やPTSDに苦しむ人の接し方などを学び合う「心のケアカフェ」を開催したりした。

さらに、コミュニティカフェやワークショップを開催し、地域住民が障害者福祉について学び合う機会につなげた。

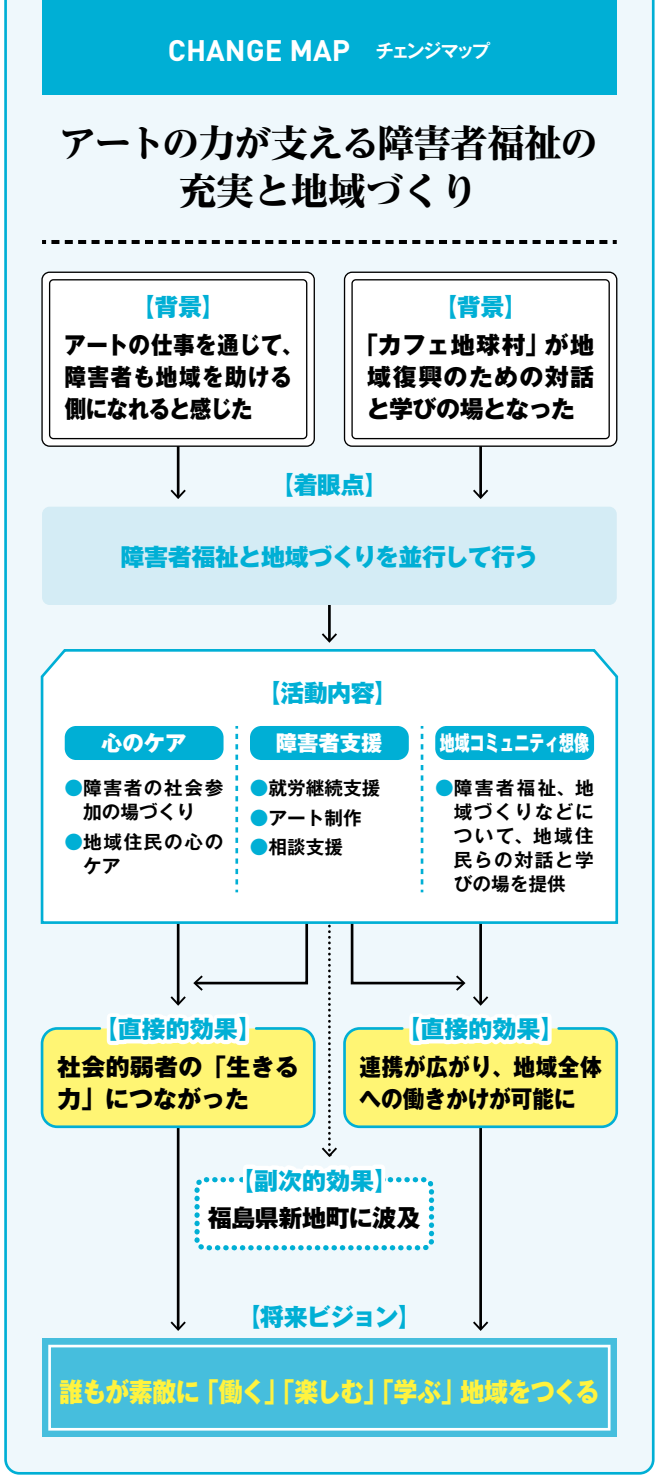
障害者支援と地域コミュニティの創造

授産施設に携わった経験を生かし、障害者の就労継続支援にも力を入れた。「就労継続支援B型事業所ポラリス」を開所し、精神・知的・発達に障害のある人を支援。町内外のさまざまな企業・団体の協力のもとで、復興したイチゴハウスの清掃やイチゴの箱詰め作業、スーパーでの資源物回収などの仕事などに取り組んだ。

また、近所の空き家を活用したアトリエハウスを拠点に、企業・団体の依頼を受け、展示用のアート作品やリーフレット用のイラスト、キッチンカーに描くアート制作などを行った。

地域に役立つ仕事を通して、障害者とその家族の自己肯定感の醸成や、前向きに生きる力につながったと手応えを感じたという。

さらに、「福祉の枠を越えた、全ての人に意味がある活動」を目標に、地域コミュニティの創造にも取り組んだ。障害のある人もない人も共に楽しめるダンスワークショップや、大企業の若手社員と地域のリーダーが地域づくりについて対話する場、地元の歴史や遺跡について学ぶ会など、さまざまな「地域住民らの対話と学びの場」を提供した。



連携・協働

世代・立場・業界を超えた連携体制

地域ぐるみで壁画を制作

JR常磐線、山下駅前にあるスーパーの壁面に、高さ2メートル、幅30メートルの壁画が描かれている。「Happyやまのもと」と題し、合戦原遺跡の線刻画や特産のイチゴなど、山元町の風土や歴史、文化をモチーフにしたアート作品である。

ポラリスの設立から2カ月後に、スーパーの経営者の依頼を受けたもので、震災直後から障害者アートで支えてくれた障害者の芸術活動支援を行う団体（NPO法人エイブル・アート・ジャパン）などが協力し、1年かけて完成させた。

制作には、障害者のほか、地元の支援学校や中学校の美術部の生徒、イチゴ農家やNPO法人の若者など地域住民も参加。ワークショップで地域の歴史・文化を学び、143点のモチーフを制作し、これをもとに、京都のアートディレクターがデザインを手掛けた。

「地域の皆さんとアート制作に取り組み、多くの方たちに障害者でも地域に貢献できることを知っていただく、良いきっかけになりました」

近隣自治体への波及

このほか、山元町役場や社会福祉協議会をはじめ、さまざまな団体や企業などと連携し、障害者福祉と地域づくりに取り組んできた。

その一つに、隣接する福島県新地町とのつながりがある。山元町での障害者支援の実績が評価され、新地町の障害者福祉に参加することになった。町役場の職員をはじめ、議員や町長とも意見交換し、障害福祉の進め方を検討。2018年に「相談支援室ポラリス」開設し、地域の関係機関と連携しながら、障害者相談や地域づくりに取り組んでいる。

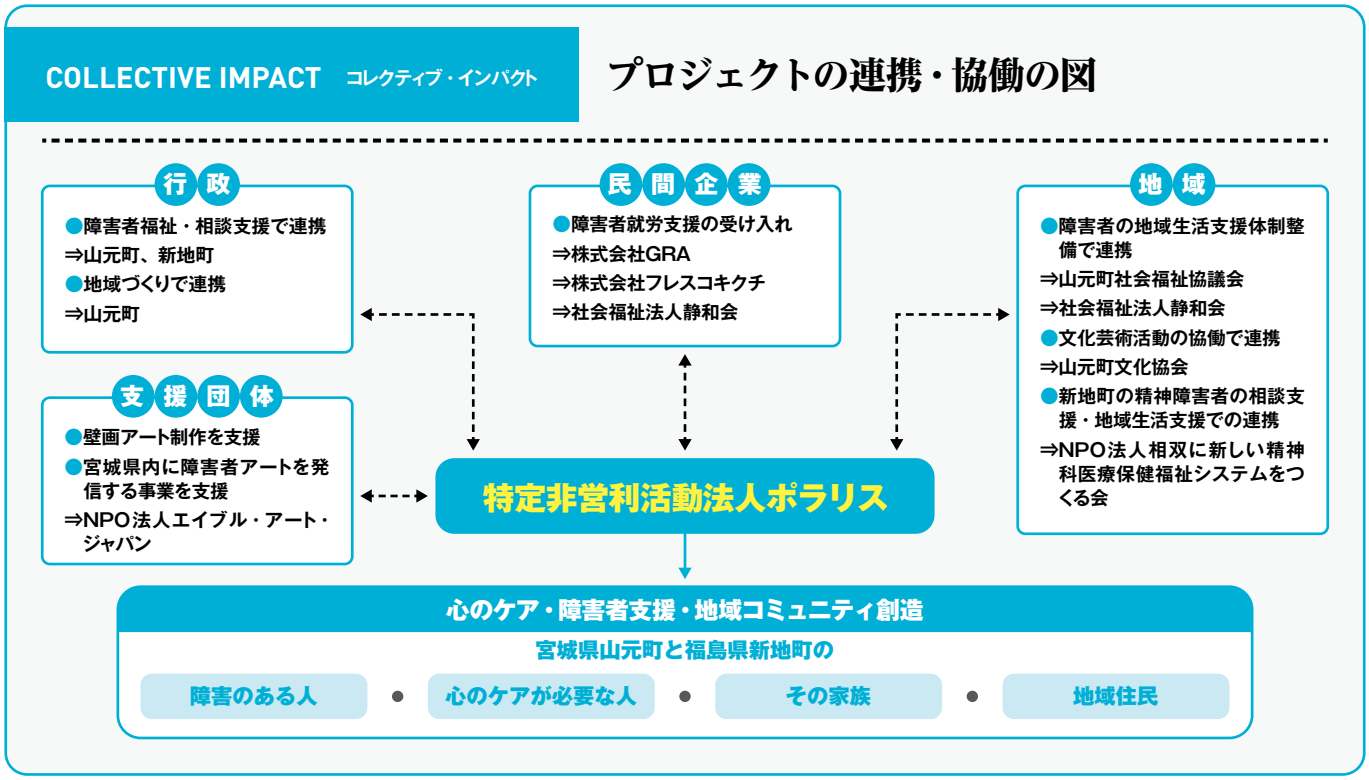
これまでの活動の積み重ねによって、世代や立場、業界を超えた地域づくりを目指すさまざまな人たちとの連携体制が整った。その結果、地域の震災復興に障害者をはじめとした社会的弱者が取り残されることが無いように、地域全体に働きかけができるようになった。

■ 就労継続支援B型事業所ポラリスの利用状況

年度	延べ利用者数（人）	開所日数（日）	1日平均（人）
2015	1,438	174	8.3
2016	3,006	291	10.3
2017	3,208	278	11.5
2018	3,570	284	12.5
2019	3,516	269	13.1

1日当たりの利用者を着実に伸ばし、障害者の地域貢献を支えている。

1 ポラリスの設立イベントに、仙台市でダンスなどのワークショップを展開するNPOも応援に駆け付けた
2 山下駅前にある壁画「Happyやまのもと」
3 町内を清掃する「ピカピカ活動」の様子
4 「アートな園芸」の様子。地域に設置する寄せ植えを準備した



持続性

支え合い素敵に暮らせるまちへ

多彩なスタッフが支える多様な活動

2018年からはボランティア活動にも積極的に取り組んだ。プランターにアートを施した寄せ植えを設置する「アートな園芸」や、町内を清掃する「ピカピカ活動」を通して、さらに障害者の力を地域に発信できたと手応えを感じている。何より優しく見守る地域の人たちが増えていると実感した。

2019年には、「ポラリスハッピーコーヒープロジェクト」がスタート。「多様性」を認める地域づくりを目指すポラリスに因んで、豊かな生物多様性が残る、南米ペルー産の有機栽培・フェアトレードのコーヒーを商品化。パッケージには、ペルーの野生動物がデザインされている。

こうした障害者の活躍の場を多方面に展開できるのも、スタッフの力によるところが大きいと感じている。「NPO経験者をはじめ、精神保健福祉士や社会福祉士、経理、画家、洋裁のプロなどさまざま。マネジメントのスキルを身に付け、NPOの後継者として育てたいと考えています」

さらなる連携で挑戦を続けたい

持続的可能な事業を進めるにあたり、課題となっているのが活動資金である。現状は会費や寄付、自主事業である障害者就労支援事業のサービス報酬が主な財源。また、町の人口減少が予想されるが、今後は地域に必要な新たな障害福祉サービスを作り、専門スタッフの育成と地域の雇用拡大にも貢献し、持続可能な活動を目指していきたいという。

地域づくりや障害福祉の活動資金については、民間の助成金を大いに活用してきた。

震災後も各地で多発する自然災害や不安が多い社会情勢の中で、心のケアが必要な人や社会的弱者が増加し、「このような状況に置かれてしまった人たちが地域で孤立し、取り残されてしまうケースがますます増えるのでは」と田口さんは危惧している。

震災を経験した山元町だからこそ、「誰もが支え合い、多くの人が穏やかに暮らせる地域」となるよう、今後も多くの人と連携して事業を広げていきたいという。

地域で暮らす人たちの素敵な生き方や、働き方の「道しるべ」となる団体を目指し、北極星（polaris）から命名したポラリス。これからの10年は、「障害者福祉活動を始める全国の人たちにとっても、道しるべになることができたらうれしい」と語った。

本事例の問合わせ先

特定非営利活動法人ポラリス
宮城県亘理郡山元町高瀬合戦原72-64
TEL：0223-36-7410
HP：http://polaris-yamamoto.com

被災した地域の新たな復興と創生を願い、障害者等を含めた誰もが素敵に生きて働くことができる地域づくりを目指した「心のケア」「障害者支援」「地域コミュニティ創造」に取り組む。